

## バフチンの「時空」概念の根底

郡 伸 哉

『小説の時間と時空』のなかでバフチンは、「時空」とは「時間と空間の相互関係」だと定義している。そして「時空」においては、時間が主導的地位を占めるという。バフチンは、しばしば主人公の時間が世界の時間と一致するか否かを問題にする。この時間の一致・不一致を決めるのは、主人公の主体的働きである。一方、主人公は、主体（世界への視点）としては空間性をもたない。空間性は世界の属性である。そうすると、時間と空間の相互関係とは、時間性の中心である主人公と、空間性をもつ世界との関係だといえる。「時空」とは、人間と世界の間を測る指標なのである。そしてバフチンが空間より時間に主導的役割を認めるのは、主体としての人間を軸に、人間と世界の間を見るからである。

『小説の時間と時空』には、「異郷の世界」、「故郷の世界」という言葉がよく用いられる。「異郷」では、人は世界に無関心でいられるが、「故郷」ではそうではない。この対概念は、上述の人間と世界との関係を空間の面から表現したものである。この対概念に注目して『小説の時間と時空』を見ると、バフチンは小説を次の線で捉えていることがわかる。すなわち、叙事詩に描かれ、古代ギリシャの広場に体现されるような「故郷」が崩壊し始め、「故郷」への反定立たる「異郷」が人々の意識のなかに出現することが、小説の成立の条件である。その際「異郷」は、公式イデオロギーに支

えられた「故郷」の虚偽を暴くという積極的意味を担っている。しかし「異郷」が単に肯定的で、「故郷」が単に否定的なものだとは言えない。古代の「故郷」は国家体制に支えられているが、「故郷」のより深い根源は「階級以前のフォークロア」にあるとバフチンは考えている。そして重要なことは、小説が「故郷」の崩壊と「異郷」の出現を基礎として持つだけでなく、「真の故郷」の回復への志向をも持っていることである。これを端的に示しているのが「教養小説」である。それは「異郷の故郷化」を主題化した小説である。ラブレーの世界の特徴（後に『ラブレー論』でバフチンが「グロテクス・リアリズム」として打ち出すもの）もまた、一種の「故郷化」とバフチンは見ている。

故郷→異郷→異郷の故郷化、という小説の捉え方は、自己と世界との一致→分裂→再統合、と言い直すことができる。ここには自己と世界の間に対する弁証法的把握がある。

「時空」概念は、始めは『教養小説とリアリズムの歴史におけるその意義』のなかでバフチンがゲーテに見いだした自己と世界の結合の理想形態であったが、やがてこの概念は拡大され、自己と世界の間関係の様々な程度、様々な様態を示し得るものとなり、それが『小説の時間と時空』に見られる小説の類型学を可能にしたと考えられる。この意味で「時空」概念は二重の性格

をもつ。(この二重性は、人格関係の理想形態と現実の言語活動の論理の両方を意味する「対話」概念にも見られ、バフチンの思考法の一特徴をなす。)

『小説の時間と時空』における「時空」概念の役割を、『作者と主人公』等の初期の著作における「美的活動」という概念の位置づけ、さらに『ことばのジャンル』や『小説のことば』のなかでの「言表」(発話)概念の位置づけと比べてみると、バフチンの思考法の根本に触れることができる。すなわちバフチンは、人間の活動のなかに、まず主体性と客体性の結節点を掴みだす。そして一方で主客統合の理想形態を打ちだしつつ、他方でその光に照らして主客関係の現実態の類型学を提示する。「美的活動」や「言表」も、「時空」と並んでそうした結節点なのである。

ただし「時空」の考え方は、主客関係に対する弁証法的把握を含んでいるという点で、「美的活動」や「言表」とは異なる。

この違いは、バフチンの重要概念である「対話」およびそれに連なる「言表」と、「時空」およびそれに連なる「教養」や「グロテスク・リアリズム」との方法論的な違いとなって現れている。すなわち「対話」概念では、主体と他の主体との関係が問題となり、その理念的極限は、融合ではなく、互いの主権を認めあう共存であるのに対して、「時空」では、人間と世界の関係が問題となり、両者の融合が理念的極限となるのである。この方法論の差は、これら諸概念に基づいて把握された文学表現の差(ドストエフスキーと、ゲーテないしラブレールとの差)となって現れている。そしてバフチンの「カーニバル」概念を理解する際には、それがこれら両者に跨って適用されている事情を考慮しなければならない。「対話」だけでなく、それと原理的に異なる「弁証法」をも視野に置いて初めて、バフチンの思想の全体に迫ることができるのである。

## 「6号室」における精神医学

角 伸 明

これまで「6号室」は、政治社会体制批判の小説、または知識人層の間に広まっていたペシミズム思想を批判的に描いた小説として研究されて来たが、今回の発表では、「6号室」は精神医学の知見を基礎に小説世界が創造されており、精神病棟を舞台にして、一定の社会文化環境(ロシアの田舎町)における「知性」と「狂気」(「精神障害」)のパラドクシカルな関係を問題として描き出した科学小説であるとの見解を述

べた。論点は次の三つにまとめられる。

第一点は、読者を作品世界の深みに引き込んで行くストーリー展開のダイナミズムが、常識的狂気観からすればパラドクシカルな関係に見える設定から生み出されているというものである。主要な主人公である医師のラーギンは、この世で何よりも知性を愛する人物として造形されている。そのラーギンが、20年間住んでいる彼の町で、20年目にして初めて知性のある人物に出会